

## 環境に存在する転倒と言うリスクへの視点

### ——学生における職種経験の違いによる転倒リスクへの視点の差異の有無——

作業療法士学科夜間部

#### 【背景】

回復期リハビリテーション（以下、リハ）病棟協会が行った全国調査によれば、医療安全上の問題で最も多く挙げられた問題は「転倒」であった。中でも、林ら<sup>1)</sup>の回復期リハ病棟における転倒事象の研究によると、転倒が最も多く発生する場所は、病室とトイレであった。今回、リスクへの視点に着目点を置いているのでリハ室でのリスクを確認したいと考えた。また、作業療法の知識は現役作業療法士（以下 OTR）と作業療法学生（以下 OTS）では知識やその経験量は大きく違うのは明らかである。そこで OTS 間でも、これまでの職業経験の知識量の差から転倒リスクへの視点に違いがあるのではないかと疑問を持ったため、職種によって出る、リスクの差を明確にすることにより、本学科の後進学生達の実習やリスク管理における教育に貢献したいという思いから今回の研究に取り組んだ。

#### 【対象および方法】

##### 1 対象者

大阪医療福祉専門学校の OTS 昼間部 1 年から 3 年、夜間部の 1 年から 4 年を医療・福祉職関係で働いている群、その他の職業・学業のみの群にわけて行った。

##### 2 方法

とある環境場面(図1)を見た時、転倒に関係していると思われるリスク箇所を○で囲み、重要度が高い順に番号を振り理由を自由記述で書くといった内容のアンケートを行い、その結果を単純計算し、出た結果を%表記で表し元画像と重ねることで視覚化を行った。



図1. 課題場面

#### 【結果】

医療・福祉関係の職業で働いている群では現場で働いていることで様々な症例からのリスクを把握しており危険な箇所のイメージができていて、幅広い視点でリスク認知し、また前方だけでなく部屋の奥までリスクの視点に向いている。平均リスク個数 2.58 個。

その他の職業・学生のみ群ではリスクの箇所が前方や目立つものに集中し、部屋の奥など、あまり目立たないリスクへの着目が見られなかった。学業のみ群はその他の職業の群よりも視野が狭い。平均リスク個数 1.90 個。

医療・福祉関係の職業で働いている群、その他の職業・学生のみ群ではリスクへの視点に差異があった。またリスクの個数にも医療・福祉関係で働いている群とその他の職業・学業のみ群に差異があった。

#### 【考察】

その他の職業・学生のみ群では視点が写真前方の目立つ物に集中しており、視野が狭い特徴がある。また、医療・福祉関係の職業で働いている群は写真全体を広く見ており視野が広い特徴がある。これは、医療・福祉関係の職業関係で働いている群が、実際の臨床の場で経験していることが他の職業よりも多いことから差異が出たのだと考えられる。

#### 【まとめ】

実際に比較・考察を行うと、医療・福祉関係の職業群とその他の職業・学生のみ群の間では視点への差異は存在しており、またリスクの個数にも差異が見られた。

医療・福祉関係の職業とその他の職業・学生のみ群の差異をなくすためには、より臨床に近い環境でリスクを考えることができる授業（OSCE）を今以上に増やすことができれば、差異は小さくなると思われる。

#### 【文献】

- 1) 林節也, 竹中孝博・他: 回復期リハビリテーション病棟における転倒事象の横断研究. 日本転倒予防学会誌. 2(3), 2016, 33-39.